

日蓮大聖人御書全集

じょうぎょうぼさつけつちょうふぞくくでん

上行菩薩結要付囑口伝

じょうぎょうぼさつけっちょくでん

上行菩薩結要付囑口伝

みょうほうれんげきょううけんほうとうほんだいじゅういち

妙法蓮華經見宝塔品第十一

とき ぶつぜん しつぱう とうあ うんぬん

そくじ
みな

い
せつ

「その時、仏前に七宝の塔有り」云々。また云わく「即時

しゃかむにぶつ

じんずうりき

もろもろ

だいしゅ

ひさ

に釈迦牟尼仏は、神通力をもつて、諸の大衆を接して、皆

だいおんじょう

しきゅ
つ

虚空に在きたもう。大音声をもつて、あまねく四衆に告げ

たれ よ しゃばこくど

ひろ
みょうほけきよう

たまわく『誰か能くこの娑婆國土において、広く妙法華經を

いままさ とき

によらい
ひさ

まさ

説かん。今正しくこれ時なり。如來は久しうからずして、當に

ねはん い ほとけ みょうほけきよう

ふぞく

あ

涅槃に入るべし。仏はこの妙法華經をもつて、付囑して在

ること有らしめんと欲す』と云々。また云わく「諸余の

きょうてん かずごうじや うんぬん もろもろ だいしゅ

經典は、數恒沙のぞとし」云々。また云わく「諸の大衆

に告ぐ。我滅度して後、誰か能くこの経を護持し読誦せん。

今、仏前において、自ら誓言を説け」。また云わく「この経

は持ち難し。もししばらても持たば、我は即ち歓喜す。諸仏

もまたしかなり。かくのぞときの人は、諸仏の歎めたもう

ところなり」云々。

うんぬん

みょうほうれんげきょうかんじほんだいじゅうさん
妙法蓮華經勸持品第十三

とき

やくおうぼさつま かさつ

「その時、藥王菩薩摩訶薩および大樂說菩薩摩訶薩は、

にまん

ぼさつ

けんぞく

二万の菩薩の眷属とともに、皆仏前において、この誓言を作

みなぶつぜん

せいごん

な

さく『ただ願わくは世尊よ、もつて慮いをなしたまわざ
れ。我らは仏滅して後において、當にこの經典を奉持し読
誦し説きたてまつるべし。後の惡世の衆生は、善根転た少
なくして、増上慢多く、利供養を貪り、不善根を増し、解脱
を遠離せん。教化すべきこと難しといえども、我らは當に
大忍力を起こして、この經を読誦し、持説し書写し、種々
に供養して、身命を惜しまざるべし』と。その時、衆中の
五百の阿羅漢の授記を得たる者は、仏に白して言さく『世
尊よ。我らもまた自ら誓願すらく、異の國土において、広

くこの経を説かん』と。また学・無学八千人の授記を得た
るものあさり。まつて、座よりしかも起つて、合掌し仏に向かいた
てまつて、この誓言を作さく『世尊よ。我らもまた當に他
の国土において、広くこの経を説くべし。所以はいかん。
この娑婆國の中は、人に弊惡多く、増上慢を懷き、功德淺薄、
瞋濁詔曲にして、心は不実なるが故に』と云々。
また云わく「その時、世尊は八十万億那由他の諸の
菩薩摩訶薩を視そなわす。この諸の菩薩は、皆これ阿惟
越致なり。即時に諸の菩薩はともに同じく声を發して、偈

と

もう

ねが

うらおも

を説いて言さく『ただ願わくは慮いをなしたまわざれ。

ほとけめつど のち くふあくせ なか われ まさ ひろ と

仏滅度して後、恐怖惡世の中において、我らは當に廣く説

もろもろ

むち

ひと

あつく

めりとう

わ

なか

とうじょう

う

くべし。諸の無智の人の、悪口・罵詈等し、および刀杖

くわ

ものあ

われ

みなまさ

しの

あくせ

なか

びく

う

を加うる者有らん。我らは皆當に忍ぶべし。惡世の中の比丘

じやち

こころてんごく

え

おも

え

は、邪智にして心詔曲に、いまだ得ざるを謂つて得たりと

がまん

こころ

じゅうまん

え

あれんにや

のうえ

なし、我慢の心は充満せん。あるいは阿練若に納衣にし

くうげん

あ

みづか

しん

どう

ぎょう

おも

にんげん

ゆえ

にんげん

て空閑に在つて、自ら真の道を行ずと謂つて、人間を

きょうせん

ものあ

りよう とんじやく

ゆえ

ひやくえ

軽賤する者有らん。利養に貪著するが故に、白衣のため

ほう

と

よ

くぎょう

に法を説いて、世の恭敬するところなること、六通の羅漢

ろくつう

らかん

ひと あくしん いだ つね せぞく じ おも
のごとくならん。この人は恶心を懷き、常に世俗の事を念い、
な あれんにや か この われ とが い
名を阿練若に仮りて、好んで我らが過を出ださん。濁世の悪
びく ほとけ ほうべん よる したが と
比丘は、仏の方便、宜しきに随つて説きたもうところの法
を知らず、悪口して顰蹙し、しばしば擯出られん』と云々。
し あつく ひんしゆく
文句の八に云わく「初めに一行は通じて邪人を明かす。
もんぐ はち い はじ いちぎよう つう
即ち俗衆なり。次に一行は道門増上慢の者を明かす。三
すなわ ぞくしゅ つぎ いちぎよう どうもんぞうじょうまん もの あ
に七行は僭聖増上慢の者を明かす。故に、この三つの中、
はじ しの つき さき す だいきん もつと はなは みつ うち
初めは忍ぶべし。次は前に過ぐ。第三は最も甚だし」云々。
ゆじゅっぽん い とき たほう こくど もろもろ きた ぼさつ

摩訶薩の八恒河沙の数に過ぎたるは、大衆の中において
起立し、合掌し礼を作して、仏に白して言さく『世尊よ。
もし我らに仏滅して後ににおいて、この娑婆世界に在つて、
勤加精進して、この經典を護持・読誦・書写・供養せん
ことを聽したまわば、當にこの土において広くこれを説き
たてまつるべし』と。その時、仏は諸の菩薩摩訶薩衆に
告げたまわく『止みね。善男子よ。汝等がこの經を護持せ
んことを須いじ。所以はいかん。我が娑婆世界に自ずから
六万恒河沙等の菩薩摩訶薩有り、一々の菩薩に、各

ろくまんごうがしゃ けんぞくあ しょにんとう よ われめつ のち
六万恒河沙の眷属有り。この諸人等は、能く我滅して後に
おいて、護持・読誦し、広くこの經を説かん』と云々 〔五
の巻畢わんぬ〕。

ぞくるいほん い とき しゃかむにぶつ ほうざ た
嘱累品に云わく「その時、釈迦牟尼仏は法座より起つて、
だいじんりき げん みぎ みて ほりよう ぼさつま かさつ
大神力を現じたもう。右の手をもつて、無量の菩薩摩訶薩の
いただき な ことば な われ むりようひやくせんまんおく
頂を摩でて、この言を作したまわく『我是無量百千万億
あそしきこう いま えがた あのくたらさんみやくさんぼだい ほう
阿僧祇劫において、この得難き阿耨多羅三藐三菩提の法を
しゅじゅう ふぞく なんだち まさ いっしん
修習し、今もつて汝等に付嘱す。汝等は応当に一心にこの
一ほう る ふ ひろ ぞうやく
法を流布して、広く増益せしむべし』と。かくのごとく三
み

たび 諸 の 菩薩摩訶薩の 頂 を摩 でて、この 言 を作したま
わく『我は無量百千万億阿僧祇劫において、この得難き
あのくたらさんみやくさんぼだい ほう しゅじゅう 「いま
阿耨多羅三藐三菩提の法を修習し、今もつて汝等に付囑
なんだち まさ じゅじ どくじゅ ひろ ほう の
す。汝等は当に受持・読誦し、広くこの法を宣べて、一切
しゅじょう もんち
衆生をしてあまねく聞知することを得しむべし。所以はい
によらい だいじひあ もろもろ けんりんな
かん。如来は大慈悲有つて 諸 の 慳惜無く、また畏るると
な よ しゅじょう ほとけ ちえ によらい ちえ ゆえん
ころ無くして、能く衆生に仏の智慧・如来の智慧・自然の
ちえ あた によらい いっさいしゅじょう だいせしゅ なんだち
智慧を与う。如来はこれ一切衆生の大施主なり。汝等はま
まさ によらい ほう がく けんりん しよう
た応にしたがつて如来の法を学すべし。憹惜を生ずること

うんぬん

なかれ』と』云々。

もんぐく ゆじゅっぽん

げい

によらい

とど

文句の九

く ゆじゅっぽん

なんだちおのの

みづか おの

にんあ

に

うに、およそ三義有り。汝等各々に自ら己が任有り。もし

ど

じゅう

か

りやく はい

ほつ

たほう

かなら

こやくな

ど

この土に住せば、彼の利益を廃せん。また他方はこの土に

けちえん

あさ

せんじゅ

ほつ

かなら

あらわ

結縁のこと浅し。宣授せんと欲すといえども、必

ず巨益無

かなら

こやくな

かなら

こやくな

かなら

こやくな

かなら

こやくな

かなら

あらわ

え

からん。またもしこれを許さば、則ち下を召すことを得ず。

した

きた

しゃく

は

すなわ

した

め

おん

あらわ

え

下もし来らずんば、迹をば破することを得ず、遠をば顯す

え

きた

さんぎ

によらい

とど

あらわ

え

ことを得ず。これを、三義もて如來これを止めたもうとなす。下方を召して來らしむるに、また三義有り。これ我が

げほう

め

きた

さんぎあ

わ

弟子、應に我が法を弘むべし。縁の深広なるをもつて、能く
この土に遍して益し、分身の土に遍して益し、他方の土に遍
して益す。また開近顯遠することを得。この故に彼を止め
て下を召すなり」云々。

記に云わく「問う。諸の仏菩薩は共に未熟を熟す。何
の彼此有つて、分身散影して、あまねく十方に遍するに、
しかも『己が任』および『彼を廃せん』と言うや。答う。諸
の仏菩薩は實に彼此無し。ただ機に在無有るのみ。無始よ
り法爾なり。故に、第一の義をもつて初めの義を顯して、

けちえん

あさ

はじ

ぶつぼさつ

したが

けちえん

『結縁のこと浅し』と云う。初めこの仏菩薩に従つて結縁

ぶつぼさつ

じょうじゅ

うんぬん

い

し、またこの仏菩薩において成就す』云々。また云わく「子、

父の法を弘む。世界の益有り』云々。記の八に云わく「藥

うんぬん

き はち やく

い

父の法を弘む。世界の益有り』云々。記の八に云わく「藥

うんぬん

き

よ

よ

つ

王に因つて』とは、本薬王に託し、これに因つて余に告ぐ。

はちまん

だいじ つ

つ

よ

これ流通の初めなり。先に『八万の大士に告げたまわく』

ひみつ

もろもろ

ぼさつ

とは、大論に云わく『法華はこれ秘密なれば、諸の菩薩に

もろもろ

ぼさつ

ま

ま

付す』。下の文に下方を召すがごときは、なお本眷属を待つ。

うんぬん

ま

驗らけし、余はいまだ堪えざること』云々。

ほんけんぞく

め

問う。何が故ぞ他方を止めて本眷属を召すや。

め

め

と

と

と

こた
答う。私 わたくし の 義有るべからず。靈山 ちようしゆ の 聽衆 てうしゆ たる 天台の
りょうぜん てんだい
所判 しょはん に 任すべし。疏 まか に 云わく 「涌出 ゆじゆつ を 三つとなす。一には
い
他方 たほう の 菩薩 ぼさつ 、 弘經 ぐきょう を 請う。二には 如來 こ に
みつ
によらいゆる
許したまわづ。三に
さん
は 下方 たほう の 涌出 ぼさつ なり。他方 たほう の 菩薩 ぼさつ は、 經 きょう を 通する 福 ふく の 大いな
き
きよう
つう
おお
がん
おこ
ど
じゅう
ことを聞いて、ことごとく願 ほつ を發し、この土に住 すむして
こうせん
な
ことを請う。如來 こ によらい
弘宣 とうせん せんと欲 ゆえ するが故 ほんに、これを為 とむることを請う。如來 こ
れを止めたもう」 等云々。

けつちようふぞく

結要付囑のこと

はじめ しょうたんふぞく
初めに称歎付嘱

「爾時仏告」より 「猶不能尽」まで

けつちょうかんじ よつ
結要勸持に四つ

けつちょうふぞく
二に結要付嘱

三に正勸付嘱

「是以言之」より 「宣示顯説」まで

しょくかんふぞく
四に釈勸付嘱

「所以者何」より 「而般涅槃」

しょくかんふぞく
疏の十に云わく「爾時仏告上行(その時、仏は上行

に告げたまわく)」より下は、これ第三に結要付嘱なり

うんぬん
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

皆これ仏法なり。これは一切皆妙名なるを結するなり。

みな
ぶつぱう
い
けつちよう
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

いっさいみなみょうみょう
けつちやくふぞく
いっさいほう
いっさい
けつ
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

いっさいいりき
皆これ仏法なり。これは一切皆妙名なるを結するなり。

いっさいいりき
みょうゆう
けつ
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

いっさいいりき
つうだつ
つうだつ
い
はちじざい
ぐ
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

みょうゆう
はちじざい
ぐ
云々。また云わく「結要に四句有り。『一切法』とは、一切

けつ
いつさいひぞう
いつさいしょ
へん
みな
じっそう
を結するなり。『一切秘藏』とは、一切処に遍して皆これ実相
なり。これは妙体を結するなり。『一切深事』とは、因果は
これ深事なり。これは妙宗を結するなり。『皆於此經宣示
顯説（皆この經において宣示顯説す）』とは、總じて一經
を結するに、ただ四つあるのみ。その枢柄を撮つて、これ
を授与す』云々。記に云わく『結要に四句有り』とは、本迹
にもん おのおのしゆう ゆうあ
にもん たい りょうしょこと
二門に各宗・用有り。二門の体は両処殊ならず』云々。
ふしょうき い
ふぞく
きょう
げほうゆじゅつ
くじょう ほう
ぼさつ なに
ゆえ ほう
菩薩のみに付す。何をもつての故にしかる。法これ久成の法

なるに由るが故に、久成の人付す」云々。

一、正しく付嘱す

一、如來の付嘱

はじめに付嘱に三つ

三、付嘱を誠む

「余深法中」より下なり

二、菩薩の領受

三、事畢わつて散を唱う

嘱累品の文段に
二つ有り

次に時衆の歓喜

「說是語時」より下三行余り

第一の五百歳 だいいち ごひやくさい 解脱堅固 げだつけんご

第二の五百歳 だいに ごひやくさい 禅定堅固 ぜんじょうけんご

第三の五百歳 だいさん ごひやくさい 読誦多聞堅固 どくじゅたもんけんご

第四の五百歳 だいし ごひやくさい 多造塔寺堅固 たぞうとうじけんご

第五の五百歳 だいご ごひやくさい 鬪諍堅固 とうじょうけんご

夫れ、仏滅度して後、一月十六日より正法なり。迦葉、
かしょう

仏の付囑を請け、次に阿難尊者、次に商那和修、次に優婆
いっぴやくねん
鞠多、次に提多迦。この五人、各々一十年にして一百年な
うば

り。その間は、ただ小乗經のみ弘通して、
ぐつう

大集經の五箇の五百歳とは
ごか ごひやくさい

だいじつきよう

ごか

ごひやくさい

しょだいじょうきょう みょうじ
ほけきょう

諸大乗經は名字もなし。いかにいわんや法華經をや。

つぎ みしゃか ぶつだなんだ ぶつだみつた きょうびく ふなしやとう ごにん

次に弥遮迦・仏陀難陀・仏駄密多・脇比丘・富那奢等の五人。

ごひやくねん あいだ

だいじょう ほうもんしようしようしゅつたい

五百年の間、大乗の法門少々出来すといえども、取り

た ぐつう

しょうじょうきょう しょう

立てて弘通せず。ただ小乗經を正となす。已上、大集經

さき ごひやくねん げだつけんご あ

の前の五百年の解脱堅固に当たれり。

しょうほう のち ごひやくねん めみよう りゆうじゅないし しとう じゅうよにん

正法の後の五百年には、馬鳴・龍樹乃至師子等の十余人

ひとびと はじ げどう いえ い

つき

しょだいじょうきょう

きわ

の人々、始めには外道の家に入り、次には小乗經を極め、

のち

しょだいじょうきょう

さんざん

しょだいじょうきょうとう

はしつ

後には諸大乗經をもつて散々に小乗經等を破失しき。

ごんだいじょう

ほけきょう

しょうれつ

ふんみよう

しかりといえども、權大乗と法華經との勝劣いまだ分明

せんじん

か

たま

ほんじやく
じゅうみよう

ならず。浅深を書かせ給いしかども、本迹の十妙。
二乗作仏・久遠実成・已今当等、百界千如・一念三千の法門
をば、名をも書き給わず。これ大集經の禪定堅固に当た
れり。

次に像法に入つては、天竺^{てんじく}は皆權實雜亂して、地獄に墮つ
る者數百人ありき。像法に入つて一百余年の間は、漢土の
道士と月氏の仏法との諍論^{じょうろん}いまだ事定まらず。故に、仏法
を信ずる心いまだ深からず。まして權實を分くることなし。
摩騰^{まとう}・竺法蘭^{じくほうらん}は、自らは知つてしかも大小を分かたず。

ごんじつ

おも

のち

ぎ

しん

そう

せい

りょう

権実までは思ひもよらず。その後、魏・晋・宋・齐・梁の

五代の間、漸く仏法の中に大小・権実・顕密を諍いし

ほどに、いざれを道理とも聞こえず。南三北七の十流、

我意に仏法を弘む。しかれども、大いに分かつに、一切経

の中には、一には華厳、二には涅槃、三には法華と云々。

しかれども、像法の始めの四百年に当たつて、天台大師震旦

に出現して、南北の邪義一々にこれを破し畢わんぬ。これ

大集經の多聞堅固の時に當たれり。

像法の後の五百年には、三論・法相、乃至真言等を各三藏

将來す。像法に入つて四百余年あつて、日本國へ百濟國より一切經ならびに釈尊の木像、僧尼等を渡す。梁の末、陳の始めに相當たる。日本國には神武天皇より第三十代欽明天皇の御宇なり。像法の後の五百年に、三論・法相等の六宗、面々の異義あり。しかれども、各邪義なり。

像法八百年に相當たつて、伝教大師日本に出でて、彼の六宗の義を皆責め伏せ給えりと云々。伝教已後には、東寺・園城寺等の諸寺、日本一同に云わく「真言宗は天台宗に勝れたり」と云々。これ大集經の多造塔寺堅固の

時
なり。

今、末法に入つて、仏の滅後二千二百二十余年に当たつて、聖人出世す。これは大集經の鬪諍言訟・白法隱没の時なり云々。

夫れ、釈尊の御出世は、住劫第九の滅、人寿百歳の時なり。百歳と十歳との中間は、在世は五十年、滅後は正像二千年と末法一万年となり。その中間に、法華經流布の時二度これ有るべし。いわゆる在世の八年、滅後には末法の始めの五百年なり。

そ ぶつぱう がく ほう かなら とき し かこ
夫れ、仏法を学する法には、必ず時を知るべきなり。過去
の大通智勝仏は、出世し給いて十小劫が間一偈もこれを
説かず。経に云わく「一たび坐して十小劫」云々。また云
わく「仏は時いまだ至らずと知ろしめして、請を受けて
黙然として坐したまえり」。今の教主釈尊も、四十余年の
間は法華經を説きたまわず。経に云わく「説時のいまだ至
らざるが故なり」等云々。老子は母の胎に処して八十年、
弥勒菩薩は兜率の内院にして五十六億七千万歳を待ちたも
う。仏法を修行する人々、時を知らざらんや。しかれば、

まつぽう はじ じゅんえんいちじつ るふ し きょうもん
末法の始めは純円一実の流布とは知らざれども、經文に
まか われめつど のち のち ごひやくさい うち えんぶだい こうせん
任するに、「我滅度して後、後の五百歳の中、閻浮提に広宣
るふ だんぜつ うんぬん まこと
流布して、断絶せしむることなけん」云々。誠にもつて
ふんみよう

分明なり。